

中学校教育実習生の学外評価と実習期間内の ストレッサー，その対処法

—— 本学過去5年間のデータ報告 ——

飯 塚 由 美
(教育心理研究室)

Evaluation of Teaching Practice in Junior High Schools
and Methods of Coping with Related Stress
on the part of Teacher Training Students.

Yumi IITSUKA

キーワード：中学校教育実習，ストレッサー，対処法

本稿では過去5年間（1989年－1993年）に渡る中学校教育実習生に関するデータをまとめ報告する。本学の中学校教職過程は，家政科，文学科を対象とするもので，中学校教諭2種免許状を取得することができる。教職志望の学生は，専門教科と教職に関する科目についての必要な単位数を満たし，中学校での2週間の教育実習を経て資格を取得する。

特に，この教育実習は学外実習として，実際の現場の中学校の多大な協力が必要となる科目である。学生は教育実習生として，これまで身につけた知識や経験を十分発揮し，自らの一層の探究心と勉学によって実習を行わなければならない。

まず，本学における中学校教育実習の現状についてその概要を説明する。

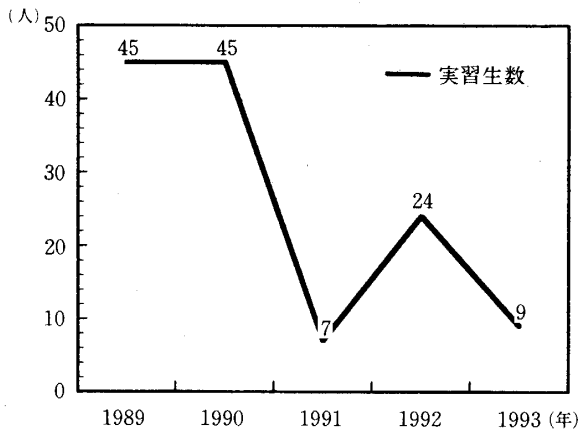
1. 過去5年間の総実習生数とその推移
1989年から1993年までの中学校実習生の総数は

130名で，その推移は，第1図に示してある。実習生数の変動は年ごとに上下し，その変動も種々の要因が作用すると考えられ，一定せず，定まった型にはない。

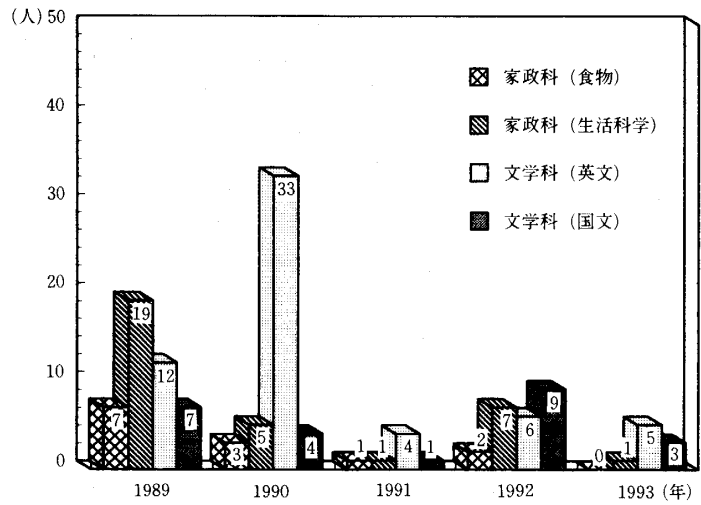
しかし，平成元年（1989）4月施行の教職免許法の改正，取得すべき課目数の増加や教員採用数の低下もあって，大きくみれば実習生数も10～20名前後に落ち着くようだ。

5年間に渡る本学における実習生の各所属学科と人数は，家政科（食物専攻）13名，家政科（生活科学専攻）33名，文学科（英文専攻）60名，文学科（国文専攻）24名である。全体に占める各学科の割合は，各々，家政科（食物専攻）10.0%，家政科（生活科学専攻）25.4%，文学科（英文専攻）46.2%，文学科（国文専攻）18.5%である。

年別による学科の内訳と推移は，第2図に示したのでご覧いただきたい。



第1図 過去5年間の実習生数の推移



第2図 過去5年間の所属学科別実習生数推移

2. 教育実習生の学外評価

1) 評価者と被評価者

2週間の教育実習期間の実習生の評価は、当該中学校の担当教員（評価者）の成績票によってフィードバックされる。過去5年間では、実習生は、県内82校（63.1%）、県外48校（36.9%）で実習を済ませている（延べ数）。

中学校での実習教科は、学生の各学科ごとの資格取得科目に応じて、家庭、国語、英語などを選択し、実習先の教科担当教員の指導を受ける。また、実習期間内に道徳などを含め、研究授業を経験する。さらに、学校における特別活動に参加する場合もある。

被評価者である実習生は、2週間の実習の中で種々の側面から指導、評価を受け、実習終了後に、中学校から成績票が送付される。評価の項目は多岐に渡る。

尚、成績票については末稿に資料として載せたので参照されたい。

2) 学外の評価項目

評価者はどのような項目内容に対して評価を行なったか、その8項目を上げておこう。

成績票として、2週間の実習中に、次の各項目に対し、A（80点以上）、B（70-79点）、C（60-69点）、D（59点以下）の評価が下される。さらに、総合評価点として、AからDまで同様の評価区分に従い評価を示す。

- (1) 勤務状況……出欠、早退、遅刻の状況、勤務中の態度、服装など。
- (2) 研究態度……自主的か、積極的か、熱心かなど。

(3) 学力……一般教養、教職教養、専門教養の力など。

(4) 指導計画と準備……教材研究の程度、資料の準備状態、指導案のたて方など。

(5) 指導の態度……まじめか、落ち着いているか、親しみやすいか、全生徒へ目をくばるかなど。

(6) 指導の技術……動機づけ、指導法、指導形態、教具の使い方、板書、言語、個別指導への配慮など。

(7) 人格的資質……自主性、責任感、協調性、創造性など。

(8) 経営・事務……環境構成や学級経営、生徒指導への関心、事務処理の能力と責任感など。

3) 各評価項目の結果について

8つの評価項目の結果は、A、B、C、Dの段階評価で、第3図に示した。総合評価では、Aが45.7%、Bが50.4%、Cが3.9%で、D評価はない。

まず、出欠・遅刻、勤務態度、服装などの勤務状況では、A評価が圧倒的に多く、全体の80.3%を占める。日頃の学生の生活状況から、少し不安な面もあったが、各自で心掛けていたようで上々である。また、真面目さ、落ち着き、親しみやすさ、生徒への目配せなどの指導の態度では、A評価は61.4%を占めている。

また、研究態度では、実習期間中の学生の自主性、積極性が問われるが、55.9%がA評価を受け、B評

価とあわせて、94.5%が70点以上の評価を得た。同様に、人格的資質についても、55.1%のA評価を受け、B評価と合わせ、94.5%を占める。

しかしながら、一方で、気になる点がある。教材研究の程度、資料の準備、指導案の立案などの指導計画と準備は、33.1%、学級経営、事務処理は、34.9%のA評価しか受けていない。

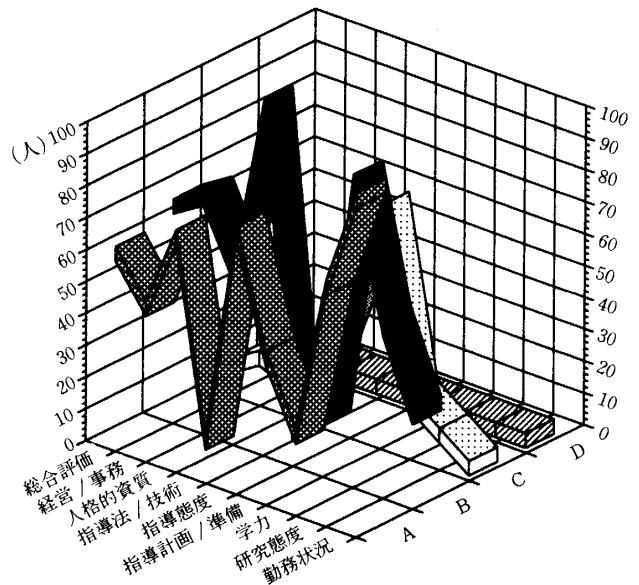
また、学力では、A評価を受ける割合はそれより一層低く(16.5%)、ほとんどの場合がB評価(72.4%)に留まり、C評価は全体の11%である。この教養の力の不足について、評価票上で、各評価の所見として記載されたもの、特にC評価を受けた学生のものを、資料の形で後に示した。

さらに、より厳しい評価を受けたのは、指導法やそれに関する技術である。A評価は、わずか7.1%しかなく、ほとんどがB評価(83.3%)に留まった。現職の教師から見て、実習生の指導の技術という点では、まだ非常に拙いものであると判断され、その評価は辛い。技術は特に長年の経験を積んだ結果のことと考えているのであろう。その点は、後に総合評価に影響する評価項目で、重回帰分析の結果、この指導法や技術が説明変数として外れることからもうかがえる。

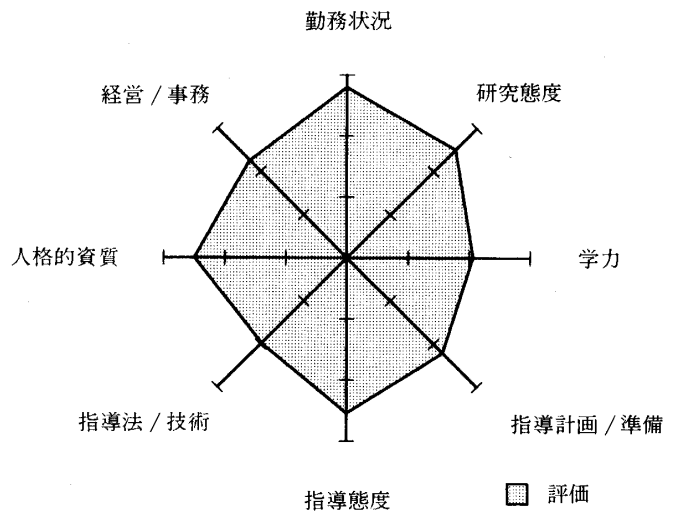
8項目の評価を得点化して、その平均を、レーダーチャートによって視覚的にわかりやすくしたものを第4図に示した。各評価はそれぞれ便宜的に、4から1まで順に数値を与えてある。

4) C、及び、D評価に対する評価者の所見
先に示したように、総合評価ではA評価45.7%、B評価50.4%で、70点以上の評価が96.1%を占める。しかし、実習校側が評定でDをつけることは稀で、ほとんど3段階の評価から選択される。また、B評価の所見は、CやDの所見と重なる部分があり、個々の評価項目を検討すると残された問題は多い。

ここで、実習校の教科担当の評価について、特にC、Dの所見を拾い上げ、評価項目順に並べて一覧にしたものを載せておく(資料2)。一部の実習生の評価所見であるが、今後の教職課程の改善にも役立つことになろう。



第3図 実習生の学外評価 (総合評価含)



第4図 8評価のレーダーチャート

5) 総合評価を予測する項目

評価者による総合評価を、先の実習生に対する評価項目、勤務状況、研究態度などの項目がどれほど説明しているか、つまり、各評価項目がいかに総合評価を予測するかについての情報を得るため、重回帰分析(ステップワイズ法)を行った。

結果的に総合評価を説明する変数として有力であったのは、実習生の人格的資質であり、研究態度である。第1表に示されるように、決定係数 $R^2 = .751$ 、回帰係数 $R = .866$ で、指導の技術を除く7項目のうち、この2項目は標準偏回帰係数 .365, .226 (p

く.01)で、比較的上位に入っている。指導法や指導の技術は、モデルから外れた。総合評価を予測する上では、他の評価項目より説明力が弱い。評価者が指導法や技術を他の評価項目と異質に考え、総合評価であまり配慮していないようだ。モデルの適切さを示す一つの指標、ダービン=ワトソン統計量は2.0である。

この実習生の総合評価と各評価項目の結果からみると、評価者が先生として必要とされるのが、その人となり、人格的資質であり、日頃の研究態度であることを認識しており、実習生の評価基準にしているのではないかと思わせる。

ただ、将来的に厳密なモデル構成を考えるなら、各評価項目間は相互に関連するものもあるので、多重共線性を配慮し、項目を絞りこんで組み立てる必要があるだろう。

3. 実習期間内の情動的経験

2週間と短期間ではあるが、実習期間の新たな経験は当の実習生にさまざまな思いを味わわせる。たとえば、実習中の出来事から生じる楽しさ、うれしさ、気遣い、悩みである。彼女たちが実習後に行う報告のなかで、一番の喜びをまとめると、

- (1) 意志の疎通—生徒とのコミュニケーションの機会：特に打ち解けた会話ができるようになった際のうれしさは格別で、非常に印象深く報告する。
- (2) 共行動の楽しさ：生徒とスポーツやレクリエーション、特別活動、掃除など一緒に行う楽しさ。
- (3) 自己の行為に対する生徒の確かな応答：こちらの質問に活発に答えてくれる、授業中、目が合うと笑ってくれるなど。疎通とも関連するが、自己の指示に生徒が従ってくれるうれしさや聴衆としての生徒の反応に不安な心が癒され、自信がもてるようだ。また自己の存在感の認識にもつながる。
- (4) 生徒との親密感の認知：親しみをみせる、なつく、慕ってくれるなど。先生として、また年上として生徒からのポジティブな情緒的接近に喜びを感じる。
- (5) 新たな役割取得と遂行の楽しさ：生徒が自分のことを先生と呼んでくれたときにうれしさを感じたなど、今までとは異なった新しい自分や、役割を楽しむ様子がある。

ここで、実習生の報告を取り上げたが、現実では、実習期間中、いつも楽しいことばかりではない。そもそも実際の現場では、思わぬ気遣いや気苦労がある。次に、その実習期間内にいったいどのような悩みを実習生がかかえていたのか—その緊張と不安を中心に、過去2年間(31名)の実習生データからみていこう。

1) 実習期間内の緊張とストレス

(1) 報告されたストレスの分類

実習期間に気を遣ったこと、緊張したことについての報告は、第2表に簡略して列記した。

報告の多くは人間関係に関するものである。気遣い、緊張が特定の空間と重なって、その場所がストレス源として認知されたものもある。特に、コミュニケーションの計り方など、関係形成の初期の気遣いが伺われる。また、挨拶やお茶の入れ時、実習の指導を受けるタイミングのとり方で苦勞するという報告も多く、先のコミュニケーションの計り方も合わせて、学生たちの対人スキル上の拙さを感じさせる。この点は、後の解決への対処法でよりはっきりしてくる。

次いで、授業に関するものが多いが、大勢の人前にたつ緊張と合わせ、実際慣れないことをする経験不足からの不安からくるものだろう。

2) 実習生の対処法

現場の実習生たちは、先に上げた緊張、気遣いの伴う問題にいかに対処したのであろうか。報告からみると、(1) 情動的、指示的サポートを求める：実習の担当教員に相談、助言をもらう、同じ実習生に助言をもらうなど。(2) 情緒的サポート：(1)にかかわるが、特に、親身な話しかけ、親しい先生からの助言など、サポートを受ける相手との関係性が重要のようである。(3) 解決のための行動修正：話をできないおとなしい子に自分から声を掛ける、コミュニケーションを計る、注意されることへの事前チェック、積極的に行動するなど、自分なりに行動を変えて対処する。また人(先生)の行動をみて自分の行動を考えるとという対処もあった。(4) 認知の転換：開き直る、気持ちを明るく持ち直す、当たって砕けろと思うなど。(5) 気分転換を試みる：体を動かす、ボーとする、家できょうだいとゲームで遊ぶ、宴会で先生と一緒に騒ぐなど、(6) 退避：保健室で休

第1表 総合評価を基準変数とした重回帰分析表

説明変数	基準変数		
	標準偏回帰係数	標準誤差	F
人格的資質	.365	.060	33.469**
研究態度	.226	.061	12.188**
経営・事務	.142	.051	6.011**
指導計画・準備	.163	.049	8.689**
指導態度	.164	.056	6.748**
学力	.161	.066	7.059**
勤務状況	.098	.081	2.960 ⁺
R ²	.751 (R = .866)		

** p < .01, ⁺ p < .10

第2表 実習期間中のストレス

<p>対人関係</p> <p>会話(3) (先生との会話、話のできない先生への対応、生徒への口調(会話の仕方))</p> <p>先生方への対応(1) (一人囲まれ監視されている気分、服装等観察される、迷惑をかけた、これまでの先生のやり方を乱さない、負担をかけないなど)</p> <p>生徒への接し方(4) (親しくなること、問題のある生徒への対応(2)、叱ること)</p> <p>身支度と接する態度(日常)</p> <p>服装(5)</p> <p>話す態度(2)</p> <p>言葉使い</p> <p>礼儀</p> <p>日常の挨拶(2)</p> <p>早朝の出勤(2)</p> <p>お茶くみ(5)、ビールの注ぎ方(歓送迎会等)</p> <p>場所</p> <p>控え室、職員室(2)</p>	<p>タイミング(間)のとり方</p> <p>お茶の準備、お茶のいれ方、入れるタイミング</p> <p>多忙な先生への指導案やノート提示点検のタイミング</p> <p>予期せぬ出来事</p> <p>教科担当の入院</p> <p>事情で一日中、一人でクラスを任せられる</p> <p>突然の指名(話をする)</p> <p>自分自身の評価</p> <p>自分の授業に対する先生の反応(意見)</p> <p>他の人の自分への評価(2) (生徒の自分に対する評価、在校しているきょうだいへの配慮(評判))</p> <p>性格(あがり症の性格)</p> <p>役割取得と遂行</p> <p>教える・学ぶ立場の両方</p> <p>学生気分との注意(心構え)</p> <p>実習生として自覚をもった接し方</p>	<p>授業</p> <p>言葉遣い(3) (研究授業での方言、生徒にショックを与えない言葉、正しい言葉)</p> <p>初めて教壇に立つ(授業)(4)</p> <p>授業参観の仕方</p> <p>研究授業(2)</p> <p>授業(精神面)(2) (直前にもものが食べれないなど)</p> <p>授業の計画と進め方(7) (授業前の点検(家庭科)、授業への取り組み、発問の仕方、授業の流れ、授業、研究授業の進め方、授業が予定より早く終わる(時間のもたせ方))</p> <p>人前に立つ</p> <p>挨拶と話(6) (全校での挨拶、多数の生徒の前での話、着任・退任の挨拶など)</p> <p>自己紹介(7) (職員室で(3)、クラスで(3)など)</p> <p>生徒と向かい合った給食</p>
--	---	--

注 2以上の頻度については()に示した

養したり、話をしたりする。(7) 一時的対処：まじめにやるふり、笑顔と大きな声で挨拶しよい子ぶる、印象をよくするなど、付け焼き場な対処で間に合わせるものもある。

授業関連の対処法については、直接的で具体的な対処法はあまり上げておらず、人に聞くなどの消極的で受身的な対処が多いように感じられる。また短期の期間であるためか、その場しのぎの一時的な対処もあり、問題解決のための拙さもないとはいえない。

実習期間の話相手は、家族（両親）や、同じ実習生仲間、友人（他の実習校）、短大（本学）の実習生が多く上げられ、物理的に身近なところと、同じ境遇にある友人との情報交換を兼ねたコミュニケーションが目立つ。

4. おわりに

過去5年間に渡る中学校教育実習生のデータからその数の推移、学外評価の提示、評価項目の結果分析、実習期間内の実習生の報告などを検討した。

学外評価は、総合評価ではB段階以上の評価が多くを占めるが、所見など、個々にみていくと問題が残る。また実習生の報告により、実習中の経験を主として、緊張場面から取り上げ、ストレス、対処法などをみてきたが、問題解決のための直接的、実質的な対処法とは言えないものも多く、今後の課題となっている。

(平成5年11月1日受理)

資料 1

年度

教育実習成績評価票

年 月 日

実習生	氏名				実習校	学校名			
	所属	学部	学科課程	専攻専修		指導教諭	年 組	印	
評価項目	評価の着眼点				評点	所 見			
1. 勤務状況	出欠・早退・遅刻の状況, 勤務中の態度, 服装など				A B C D				
2. 研究態度	自主的か, 積極的か, 熱心かなど				A B C D				
3. 学 力	一般教養, 教職教養, 専門教養の力など				A B C D				
4. 指導の計画と準備	教材研究の程度, 資料の準備の状態, 指導案のたて方など				A B C D				
5. 指導の態度	まじめか, 落ち着いているか, 親しみやすいか, 全生徒へ目をくばるかなど				A B C D				
6. 指導の技術	動機づけ, 指導法, 協調性, 創造性など				A B C D				
7. 人格的資質	自主性, 責任感, 協調性, 創造性など				A B C D				
8. 経営・事務	環境構成・学級経営・生活指導への関心, 事務処理の能力と責任感など				A B C D				
出席状況	出席すべき日数	出席日数	欠席日数	欠席事由	遅 刻	総実習時数		時	
	日	日	日	病欠 日	(内無届 回)	実習(授業)		時	
				事故欠 日	早 退	特別活動		時	
				計 日	(内無届 回)			時	
総合所見						総合評価	A B C D		

- 注 1. A(80点以上), B(70~79点), C(60~69点), D(59点以下)で, 評点を○でかこんでください。
 2. キリトリ線にしたがって切りとって厳封のうえ, 学校長から大学へお送りください。
 3. 所見はできるだけ具体的にくわしく書いてください。

資料2 C, 及び, D評価所見の一覧

評価項目	所見
研究態度 自主性・積極性など	<p>生徒理解のための努力にやや欠ける。指示されたことは努力するが、自主的に行なうことは少ない。</p> <p>積極的であり、もっと熱心さがほしい。</p> <p>ある特定の領域には意欲的に取り組むが、他の領域にはあまり関心がない。</p> <p>自主的な研究態度にやや欠ける。</p> <p>常に指導教官の協力、助言によつての研究活動だった。</p> <p>授業はなんとかこなせた。</p> <p>自主性、積極性に欠ける。消極的な態度。</p>
学 力 一般教養・専門教養・教職 教養など	<p>教生の自覚がほしい。</p> <p>発音、英語全体の力、努力を要す。もっと専門教養を身につけること。</p> <p>専門教養の力をもっとつけること。</p> <p>教職、専門教養にやや欠ける。</p> <p>基礎的な事項は身につけているが、発展的知識になっていない。</p> <p>学力不足だった。</p> <p>話す英語にもう少し流暢さがほしい。</p> <p>基礎的な内容の定着は今一歩。</p> <p>専門教養について表現力を更に高める必要がある。</p> <p>一般、専門の両面において基礎、基本が不十分で初歩的ミスがあった。</p> <p>食物に関する知識はあるが、他の領域にはあまり関心がない。</p> <p>漢字、語句などにおいて、少し基礎的な力が不足。</p>
指導の計画と準備	<p>教材の主題のつかみ方が浅い。探求する姿勢が欲しい。</p> <p>指示した具体的なことはできるが、自分で指導案を作り上げることはかなり困難であった。</p> <p>教材研究は真面目にできたが、資料の準備、指導案については経験不足のため、不十分。</p> <p>教案の形式を理解していなかった。</p> <p>研究授業の計画に努力したが、事前のことで、いまひとつ計画性がほしい。</p> <p>もう少し積極的に準備してほしい。</p> <p>計画、教材の準備が遅い。</p> <p>指導案をどの立場によるべきかが曖昧。</p> <p>教材研究に不足はないが、指導計画の作成などもう少し計画的でありたい。</p> <p>資料作成などの発想は良いが、指導案の出来上がりが大変遅かった。</p> <p>全体的な見通し、細部の計画などにおいてやや不十分。</p> <p>指導目標をもち、生徒の活動を見通した指導案の作成は無理である。</p> <p>指導案の立て方がなかなか理解できず、授業の流れがうまくいかなかった。</p> <p>教材研究はよくやったが、指導研究は努力を要する。</p>

指導態度 真面目さ・落ち着き・親しみ・目配りなど	(D) 真面目であるが、生徒へ目を配るゆとりがなく、ひとりで話を進めてしまっている。 一生懸命ではあるが、生徒への目はほとんど届かなかった。 真面目に取り組んではいるが、やや落ち着きがない。 生徒の中に入って親しみ、若さをぶつけてほしい。 生徒と次元が同じで、大学生としては幼稚性が残っている。 落ち着いてはいたが、親しみやすさには欠けていた。 生徒の中に入り、関わりをもつ努力がほしい。
指導技術 学習への動機づけ・指導法など	意欲はみられたが、考えがまとまらない。順序や系統性への配慮が足らず、指導はやや拙劣である。 工夫が足りず全体にワンパターンだった。 動機づけ、指導法をもっと工夫してほしい。(板書、言語、個別指導など) 生徒の示す思わぬ反応に臨機応変に対応できない。 授業の流れがつかめないまま、途切れがちになることが多かった。 動機づけや言語の点で、やや難がある。ひとりで話して板書をすすめてしまうので内容が徹底しにくい。 やや声が小さく、子供に理解しにくい。 教科書の正しい語句を使って教えるように指摘、指導した。 発言の途中で言葉つまることがあった。 実習期間が短いため指導技術は今一歩である。 発問の仕方、板書、机間巡視などに少し課題を残した。
人格的資質 責任感・協調性・自主性・創造性など	自分の言動に対して、責任のもてない場面がみられた。 自分の困った時だけ相談するのではなく、もっと自主性、責任感をもって欲しい。何事にも指導を求める姿や、積極性がほしい。 言われたことは大体出来たが、不十分な面もあった。 やや自主性に欠け、実習の意欲に欠ける。 言葉遣いに疑問がある。笑顔が非常に少ない。 性格でもあると思われるが、緊張がある。他教員からの話かけにももう少しこたえたらよいと思われる。
経営・事務 環境構成・学級経営・事務処理など	(D) 給食指導に於いても、生徒の指導という段階まで達しなかった。 事務的処理は確実性をもっているが、状況判断に的確ではない。 消極的で学級づくりに参加するのは無理があった。 生活指導など表面的なところもみられた。 生活指導の意識や指導内容の理解が十分でない。 積極的な取り組みがほしい。 教科指導だけで精一杯だった。 給食指導などにも目をむけるともっと良かった。 朝礼、終礼、給食、清掃指導を通して参加できた。 担任としての種々の能力、関心はやや低いようだ。 事務処理は少々難である。

注 (D)はD評価、表示なしは全てC評価